

新刊  
紹介

For some in ancient books delight;  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth Not  
to be though expert in both.

「同志社大学」

— 国の良心を育てる —

(毎日新聞社・大学シリーズ)

B5判・一八四頁・一〇〇〇円)

国に個性のあるごとく、大学にも独自の個性があつて、はじめて世に存在の価値を問うことができる。学園の個性は永い歴史に築かれ、しかも日に新たに自己を改造する生命の躍動を続けなければならぬ。同志社は国の良心として類いまれな熱血の人、新島襄先生の至誠を土台として、東の慶応・早稲田とはまた違った自主独立の学

風を育て、約十萬の卒業生はそれぞれの場所で、同志社人として、天を愛し人を愛する同志社スピリットを悠々と守り続けている。

いま激変する社会に棹さして、わが国数多くの大学は、ともすれば独自の氣風を養うことを忘れ、殊に近年の大学紛争によって、個性喪失か独創躍進かの重大分岐点に立たしめられている。同志社大学もまた、このきびしい問いの前に立つて、明確な決断を迫られているのではないであらうか。

そのとき、「国の良心を育てる」の副題をもつこの新書が、毎日新聞社から発刊せられたことを、とりわけ意義深く思う。それは、過去より現在にわたるさまざまの懐しみ親しまれる写真集とともに、住谷悦治総長、秦孝治郎理事長をはじめ、学園にかわり深い諸氏の同志社論を掲げ、同志社の個性を浮き彫りにする。

同志社には九十六年の歴史がある。学園に危機の襲うごとに、私たちはその伝統を顧み、その歴史の重味は、私たちを勇気づけて未来に立ち向わせる。総長はじめ諸氏の文章には、この歴史に深く根差した責任

感と自信とが底光りして、いま紛争を乗り越えて前進しようとする私たちに大きな励ましを与える。

秦理事長の文章は、「過去から未来へのビジョン」。いまの同志社に最も必要なことは、幾百の大学群のなかに平準化されることのない同志社教育独特のビジョンを高く掲げて、まこと「同志社」の名にふさわしく、教職員・学生・校友、ともに同志社携えて、大学改革の先頭に立つことではないかならぬ。本書を繙きながら、私たちはあと数年で迎える創立百周年を記念するための大事業の、何たるべきかを真剣に考えようではないか。

同志社内輪の出版ではなく、毎日新聞社の手で企画され、一層ひろく世の読者を得ることのできるのを喜びとしたい。

(大学文学部教授・嶋田啓一郎)

詩集「海辺の地方から」

森田 進著

(昭森社・B6判一〇六頁・六〇〇円)

著者は一九六四年同志社大学（美学）を卒業、続いて早稲田大学（国文学）卒業後、梅光女学院の教師となり、後、東南アジアを旅し、現在四国学院大学専任講師である。同志社大学在学中アーモスト館の寮生であった。だからこの人もまた同志社が生んだ若い詩人の一人である。

はやくから詩筆を執っていたが、このたび過去十年間の作品の中から、自分に「愛情深い作品ばかりを集め」て処女詩集を出版した。

おさめるところ三十五篇、佳品にみちている。読みすると、そこにはキリスト教的反戦平和主義と、脱体制との相反性が共存統合を求めてあがく姿が目につく。彼は戦争を呪い、民族の解放を願い、人類の連帯を希求する。

「向日葵」はすぐれた反戦詩の一つ。そして戦争の悲惨は「青春」の中でも／＼のう／＼村人は狩り出された／ひねもす壕を掘らされ銃の撃ち方を教えられた／きょうへリコプターが翔びおりた／いつものように／泥水から／引き上げられた屍体はぼろぼろ／胸に弾痕／そこに蝶は翅を休めてい

た／＼と歌われている。また／＼ああ今／クメールの血は石の中からにじみ出る／＼の「石の廢墟」には民族の解放が歌われ、「韓国学生梁勝将に与える詩」には超民族的連帯感がにじみ出ている。

詩人のこういった心はキリスト教的信仰の基盤の上にある。信仰への迫害とそれに対する永遠の抗告を「天草」で実感させる。「私」において死の彼方をみつめる彼は、復活を信じる。／＼こんなにしずかな夜／時がみちて／すてられたひとびとの涙から／あたらしいメシアが生れるのです／＼と歌う「聖夜」や、／＼敗北が安っぽい美学を拒否しきった時に／＼ひとは生きるのだ／＼の「弔辞」や次の「葬送」の中にそれが激しくゆらめいている。

だが彼にあつては、宗教的自己否定の復活とイデオロギー的自己否定の復活とがどこかで重なっているようだ。そして後者が彼に伝統または体制からの脱出をはからせる。こうして日常性を否定した日常性を「序列」で歌い、「岸壁からの報告」で／＼しきりに脱出を企て／＼つつ、「赤松の丘」に至って／＼はくは松林に背を向けて／＼旅立つ

ことにしました／＼とハッキリ体制的習慣からの離別へ志向している。

けれどもまたしてもおちいるのは「出発」に見られるように、／＼はくは出発する／＼支持されないままに／＼裏切りのレッテルを貼られ／＼敵からは敵のレッテルを貼られ／＼という／＼孤独陣営／＼である。所詮は自らの中での背信と復讐の反復に苦悩し、／＼より鋭い視点を据えようと決断はますます速くなり／＼行動はむなし紫陽花となり／＼「視点」ながら、どこまでも一つの新しい神話の世界に生きる意義をひたすら願望しているように思われる。

多様きわまりないこの現実において、流動の中に不動を、雑多の中に統一をつかみ出すことなくしては生きられない、それでいて捉えるに捉えがたくて、危うく押し流されようとするあがきこそは現代相の一面でありとすれば、この詩集の中には、そういった現代人の受難がよく歌われ、まさに若い世代から生れる日本現代詩の特徴をよく備えている。総じて詩的感覚に富み、思想の映像化にすぐれ、比喩と象徴も見事な好詩集である。

（大学文学部教授・児玉実用）